

不安なときに大切な、「見通し感」
～それも、根拠ある情報に基づいたものであれば、希望につながる～
映像ディレクター 高橋夏子

片木美穂さま

昨日は、熱く濃厚、かつ軽妙な講義を受講でき、感謝しております。また、10年以上ぶりに、直接お会いし、お元気そうなお姿を拝見でき、とても嬉しく思っております。

片木さんに初めてお会いしたのは、「ドラッグ・ラグ」の取材の時でした。とても理路整然としている上に、感情にも訴えかけるお話しぶりに、「すごい人が出てきたもんだ！」と衝撃を受けたことを思い出します。

昨日の講義では、大きなうねりを作られた「その後」にも触れておられて、患者会活動を継続することや、医療を変えていくことの難しさも、改めて知ることができました。

毎日、数時間じっくりと、患者さんからの電話相談を受けていらっしゃるこのこと、頭が下がります。

人が不安なときには、「見通し感」というものがいかに大切なのかと思います。安易な見通し感は、絶望を招くかもしれませんが、根拠ある情報に基づいたものであれば、希望につながるのですね。

自分の仕事や、個人的な相談をどう受けるかといったことに対して、大きなヒントを頂いたように思います。

片木さんがおっしゃった「患者の意思決定感が低い」という課題にも、激しく同意です。

ご存じかもしれませんが、私はこの13年ほど、仲間のママ達と、小児科の先生方の協力も得ながら、「知ろう小児医療 守ろう子ども達の会」で、患者と医療者の架け橋を作る活動に関わってきました。

[知ろう小児医療守ろう子ども達の会について -](#)
[一般社団法人 知ろう小児医療守ろう子ども達の会 \(shirouiryo.com\)](#)

会の活動では、「知ることで守れる命がある」、「医療は100%ではない」、「医療者も人、基本的なコミュニケーションは変わらない」など、子どもの病気との向き合いや、医療者との関係性について、色々と発信を重ねてきたつもりです。

みんながみんな、子育てをするわけではないですが、子どもが幼いときに親として学んだことは、その後の人生の中で、高齢の親や自分が病気になったときにも、重要な手がかりになるのではないかと思います。問題は、それを学べる場がまだまだ限られている、ということでしょうか。

ところで、「人生会議」から始まった、片木さんの被害のお話、憤りを感じながら拝聴しておりました。そもそも、厚労省の最初の発信も、ずれていて、センスがないと思いますが、メディアの取り上げ方には、そこに軸足を置く人間としても、震えるほどの怒りを感じます。

(そんなことだから、テレビがますます信頼されなくなるんだよ・・・！)

片木さんの note も拝読いたしましたが、講義で語りつくせるものではないですね・・・

SNSの怖さは、私も公私を通じ身に染みて感じているのですが、この潮流を止めることもまた難しい。あまたの情報の渦に巻き込まれないで、泳げる方法、知りたいです。

またお話を伺える機会があれば嬉しいです。ありがとうございます。